さざなみ国語教室
さざなみ国語教室
第512号　2024年11月25日
発行者代表　吉永幸司
連絡先　大津市柳川2-11-5
℡ 077-522-1008
発行所　滋賀児童文化協会
NPO 現代の教育問題研究所

豊かな「言葉」の獲得

南川　貴子

私たちは、自分の思いを伝えるのに「言葉」を使用する。「言葉」を獲得しやり取りをすることで、情緒が安定し、良好な人間関係が築かれてゆく。「言葉」を獲得することは、「人」として成長していくのに不可欠である。言葉の獲得がどのように成長につながっていくのか考えてみたい。

特別支援学校に勤めていた時、一年生の難聴の児童を担任した。「聞こえづらい」ことに気づくのが遅く、入学直前に難聴が分かったため、手話や補聴器など適切な支援は受けてきていなかった。活発で、状況を見ておおよそのことを理解する力はあったが、言葉が分からない不安から指吸をして涙ぐむことも多かった。入学後は補聴器をつけ、手話とサインを併用しながら、簡単なことを手話や身振りで伝えるようになってきていた。

ある時、校外行事で、演劇を鑑賞することになった。鑑賞後は遅くなるので、学校ではなく現地まで保護者の迎えを依頼していた。いつもと違う状況を、事前に説明はしていたが、いざ学校を離れると、母がいつ迎えに来るのか、不安でたまらない様子。演劇の最中に、何度も「お母さん」「家」「バス」「ＯＫ」と教員に向け、身振りで伝えていた。「終わったら」「お母さん」「車で」「来る」大丈夫と答えると、また少し安心して待つ。そんなやり取りを繰り返しながら、最後まで泣き出すことなく、待つことができた。不安な気持ちを、身振りや手話で表現し伝えることで、自らの気持ちを落ち着かせていたのだ。

この児童は、自分の気持ちを相手に伝える手段を獲得していた。これがなかったらどうなっていただろう。不安な気持ちを伝えるのに、泣き叫ぶのか、暴れるのか、その場を飛び出していたかもしれない。気持ちを「伝える手段」を獲得することは、情緒を安定させ、困難を乗り越える力にもつながっていくのだ。

気持ちを言語化し、伝え、受け止めてくれる相手との情動的なやり取りが、心の安定を生む。その土台があってこそ、困難を避けずに乗り越える力へとつながっていくのだ。また、豊かな言語を育み、言語で思考させることが、主体的で深い学びへとつながっていく。子どもの教育に携わる私たちは、そのことを常に意識し、児童が豊かな「言葉」を獲得できるよう、教育活動に取り組んでいきたい。

（尼崎市立潮小学校校長）

さざなみ

▼「教科書「紙」に回帰（読売新聞・10月22日）―この見出しが飛び込んできた。記事は「スウエーデンで学力低下」という小見出しを加えて「再考デジタル教育」の（連載）である。日本では文部科省がデジタル教科書の推進に向けて検討をワーキングループが始めたと記事を付け加えている▼デジタル教科書が令和6年度から教科を絞って「本格導入」され、小中学校の英語や数学で使える状況にあるという。今回の記事の意図は定かではない。が、国語科の授業に関心があり、スウエーデンの次の事例紹介に興味を持った▼（以下は記事の引用）「教科書の例文を参考にワークブックに文章を書いてみましょう。」先生が呼びかけると、子ども達は語順を学ぶ課題に取り組み始めた。鉛筆を走らせ手を止め、考え込む子どもたちを回り、先生はヒントを与える。「紙の教科書や鉛筆を使う時間を増やしてから、集中力や考える力が伸びた。そう実感している▼この事例を続けて「IT先進国のスウエーデンで、授業風景が変わり始めている。紙の教科書や手書き重視する（脱デジタル）に大きくかじを切った」と記事は伝えている▼メール等が日常的で電子機器に慣れている子どもたち。日頃、文章を読む力と文を書くことに物足りなさを感じていた時だったのでスウエーデンの教育事情の記事に学ぶことが多かった。

（吉永幸司）

さざなみ国語教室のホームページ　http://www.eonet.ne.jp/~sazanamikokugo
NPO 法人 現代の教育問題研究所のホームページ　http://kokugo-npo.com/index.html　ご覧ください。

低学年の作文指導

川部　長人

低学年の作文指導で大切にしていることが三つある。①ことがらの順序に気をつけて書くこと。②五感を使って感じたもの、考えたことを書く。③書いたものを読み合い、よいところを伝え合うこと。この三つの指導を中心に現在まで取り組んだ作文学習を振り返る。

◆◆◆◆◆◆◆◆

「さゆがあるいた」　Ｓさん

さいきん、妹のさゆがあるきました。さゆがあるいたところをはじめて見て、（とてもかわいいな）と思いました。あるいているさゆを見たら、えがおであるいていました。お母さんと、妹のさわとわたしが「あんよがじょうず、あんよがじょうず」といいながら、がんばってあるいていました。ほんとうにとてもかわいかったです。

・友だちから：わたしにも弟がいて、毎日けんかするけど、そんな弟にもかわいいときがあったのだと思い出しました。

◆◆◆◆◆◆◆◆

「友だちとやったゲーム」Ｅさん

今日は友だちがあそびにくる。楽しみだ。しゅくだいもいつもよりらくちんだ。今日は六時間だったので、あそぶ時間がいつもよりすくない。なので、友だちを早くよべるように、早くかたづけをした。そして、友だちがきました。まず、なにをしようか話しました。そしてゲームをすることにきめました。何のゲームをしたかというと、カービィのゲームです。ゲームをしていたら、あっという間に友だちが帰る時間です。友だちに「あした、学校でね！」と言っておわかれしました。また友だちをさそいたいです。

・友だちから：お別れの仕方が素敵ですね！

◆◆◆◆◆◆◆◆

「まさかの五いだったリレー」　Ｔさん

とうとう来た。この時が。周りの人たちの目線がぼくたちに向いている。全いんが自分のばしょにとうちゃくしたとき、先生がピストルをうった。みどりチームのみんながつぎつぎにバトンをつなぎ、ついにぼくの番が回ってきた。コースを走り切ったがその時にはさいかい。アンカーが五いに上がったが、ぎりぎりどっちがはやくゴールしたかがわからない。ついにけっかはっぴょう。その時には体がとてもふるえていた。けっかは、なんと五いだった。教しつにもどると同じチームの友だちがえがおだった。そのあと先生から「よくがんばった」とほめてくれた。

・友だちから：練習の時はずっと最下位だったけど、運動会の日に五位になれて、とてもうれしかったね。

◆◆◆◆◆◆◆◆

夏休みが明け、子どもたちの表現も少しずつ豊かになってきたように思う。作文指導の三つのポイントを大切にして、書くことが好きな子どもを育てたい。

（湖南市立菩提寺小学校）

『アメリカからの二人の転入生』

井上　滉斗

一学期の頃の話だが、私が担任をする二年一組に、男の子と女の子の二人のなかまが増えていた。二人とも、遠路はるばるアメリカから、一時帰国を利用して体験入学してくれたのだ。

二人が来る前に、道徳科の「タヒチから来た友だち」という教材で『もし、他の国から、転入生が来たら、どんなことをしたい？』とみんなで考えてみた。子どもたちは、いろんな『たい』を考えた。

・学校のルールを教えてあげたい。
・日本語を教えてあげたい。
・英語を習っているから、英語で話したい。
・困っていたら助けてあげたい。
・友達になりたい。　など…

国語科の学習ではなかったが、子どもたちは、『言葉による見方・考え方』を働かせていたように思う。意見交流時も、「もし、日本語は話せなかったらどうやって伝える？」「一緒に遊ぶなら、どんなことがいいのかな？」と質問しあいながら考えを深めていた。言語の違いがあるからこそ、今もっている言語感覚を生かして考える姿が見られた。

道徳科の学習の終わりに、「来週から、本当にアメリカから転入生が来るからね。」と伝えると、子どもたちは、目が点になり、「え、先生、新しいなかま本当にふえるの。」と最後聞いてきた。私が「本当だよ。」と言うと、教室中から、「やったー」と歓声が起こった。子どもたちにとって、なかまや友だちが増えることはうれしくて、幸せなことなのだと、私もこの時に再認識した。

その次の週、二人が教室に来た。二人が自己紹介をしたとき、二人の話を最後までうなずきながら、「わたしといっしょ」と口にする姿もあった。相手を大切に思う気持ちがそこからも伝わった。また、昼休みには、子どもたちが二人へ校舎案内ツアーを行っていた。二人とも日本語の勉強をしているが、まだ少し会話の難しさもある。それを自然と感じ取り、伝わってなさそうと思ったら、言葉を変えて伝え直していた。二人の転入生も、二年一組の子どもたちにとっても、この経験はよりよいものだと感じた。

二人の体験入学は、一学期末までだけで、二学期からはアメリカに戻った。この間、アメリカからの二年一組宛ての手紙が届いた。体験入学に来てくれた子たちからだ。子どもたちはとても喜んで、すぐに返事のお手紙をみんなで書いた。次の返事が楽しみだ。

（豊郷町立日栄小学校）

作文教室「自分の性格」

畑中　翔太

作文の指導を続けています。学級の子どもの近況は、教師が提示したテーマについて五分間構想を練り、十分間で書く活動を続け、書きたいことを中心にまとまった文を書けるようになってきています。

実践の「自分の性格」を紹介します。「自分の性格を一つ挙げ、構成を考えて書こう」という目当てを提示しました。初め子ども達の中には、「えぇ、性格か」「わからん」と反応する子もいました。そこで、思い浮かぶ性格をどんどん挙げていくことにしました。

子どもが挙げた性格

・優しい　・キレ性　・自己中心
・真面目　・不真面目　・ナルシスト　・すぐ笑ってしまう
・涙もろい　・素直　・かまってちゃん　・落ち着いている　・恥ずかしがりや　・頑張り屋
・マイペース　・気分屋　・ポジティブ　・ネガティブ　・元気
・明るい　・暗い　・天然
・思ったことをすぐに言ってしまう

自分の性格を一つ選び、文の構成を考える時間を取りました。

T『「初め」には何を書きますか。』

C「自分がどんな性格なのかを書く。」

C「性格の意味を辞書で調べて書いていいですか。」

T「なるほど辞書を使うと丁寧ですね。『初め』で性格をはっきりさせられるといいですね。」

T「『中』は何を書きますか。」

C「実際にあった出来事とか。」

C「自分のことをそう思った経験がいいと思います。」

T「いいですね。読み手に伝わるように具体的に書きましょうね。」

T「『終わり』はどうですか。」

C「自分の性格について思ったこととか。」

T「とか？」

C「これから、その性格をどうしていくか。」

教師が構成を考えなくても、子ども自身が構成を立てられることがよかったです。特に、辞書で性格を調べるという発想は私には無かったので、面白いなと思いました。その後、大枠の構成を元に自分の構成を書く時間をとり、十五分間で書く活動としました。

ある子が文の『終わり』で「友達が自分のことをそう思っているのが意外でした。」と書いており、書くことを通して自分を多角的に捉え直している姿がありました。

また、仲間の作文を紹介する時には、他の人の性格について聞き入っている姿があり、子ども達にとって「性格」は興味を惹かれるテーマであることが感じられました。今後、まだ書けていない「性格」を題材に、興味をもって書ける場を設定していきます。

（大津市立田上小学校）

交流の場面の工夫を中心とした授業改善の取り組み

山田　定子

「ちいちゃんのかげおくり」（光村図書三年下）を扱い、「場面を比べながら読むこと」「感想を持って交流すること」に重点を置いた学習。

児童らが、
・自分の考えを友だちに伝えよう。
・友だちの考えを聞こう。
・友だちの考えを見直そう。

という意識を持って交流場面にのぞみ、友だちの意見を取り入れて考えを深めていくことができるよう、学習を計画し進めた。

本教材は、第一場面と第四場面の「かげおくり」が対照的に描かれている。その二つの場面について、物「ちいちゃん」の様子や気持ち、相違点を確かめたり、中心人物の変化を読み取ったりすることで、物語への感想を深めさせたいと考えた。また、深まった感想を友だちと紹介し合う中で、それぞれの感じ方に違いがあることに気付かせたいと考えた。

本文を読み進め、最後のまとめる活動の時間。

・この話はどんな話だったか。
・この学習をしてどんな気持ちになったか。
・その理由は？

ということについて考えをまとめ、それを交流するようにした。交流は、感想を読み合うだけでなく、構想メモをもとにして、自分の感想と「似ているところ」や「違うところ」を中心に、自分はどう感じたかを伝え合うというもの。まず、交流の前に、学習の進め方を確認するため、一人の児童が全体の場で、構想メモをもとに自分の考えを発表するようにした。そして、その発表について学級の児童が感じたことや意見を出し合うようにした。そこでは、「同じような『悲しい話』で、理由も同じところだった。同じように感じたけど、理由は違うところだった。ぼくの気づかないところを聞けてよかった。」といった感想が出された。

その後、グループで、友だちの考えを聞き、各々について感想や考えを出し合うようにした。はじめての学習形態だったので戸惑う姿も見られたが、聞き合っている内に少しずつ方法も分かり、友だちと自分の考えとを比べ、次のように「似ているところ」や「違うところ」に気付く様子がたくさん見られた。

「私と同じように、『ひとりぼっちになって悲しい、さみしい話』だ」という友だちがグループの中にもいっぱいいてびっくりしました。思ったところが、友だちと同じところや違うところもあって、グループの中で手をあげて発表できてよかったです。」

「似ているところ」「違うところ」に着目するようにしたことで、児童が友だちの発表の中で何を聞けばよいかが分かり、メモも取りやすかったようである。どの児童も、グループの中で自分の思いを自由に話せてよい交流ができたと満足気であった。また、自分の考えをメモに書いてまとめていたので、友だちの考えとの「似ているところ」「違うところ」に気付きやすかったようである。

このような学習を繰り返していくことで、自分の考えを友だちに伝え、友だちの考えを聞いて自分の考えを見直せるような、お互いに深め合える学習が定着できたらと考えている。

（野洲市立北野小学校）

児童が「言葉による見方・考え方を働かせる」ために

北川　雅士

　今年度から滋賀県総合教育センターで、研究員として勤務している。滋賀県内の研究協力校２校において教材研究や単元構想の段階から国語科の授業づくりに参加し、指導者と協働して授業実践を進めている。

　今年度、自身の研究のキーワードの一つが「言葉による見方・考え方を働かせる」である。小学校学習指導要領解説　国語編では、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善に関する配慮事項として「単元など内容や時間のまとまりを見通して、その中で育む資質・能力の育成に向けて、児童の主体的・対話的で深い学びの実現を図るようにすること。その際、言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、言葉の特徴や使い方などを理解し自分の思いや考えを深める学習の充実を図ること」と示されている。

　また、「言葉による見方・考え方を働かせる」とは、児童が学習の中で、対象と言葉、言葉と言葉との関係を、言葉の意味、働き、使い方等に着目して捉えたり問い直したりして、言葉への自覚を高めることであると考えられる」と記されている。

　研究では児童が自ら進んで言葉による見方・考え方を働かせることができるように指導の手立てを講じながら授業実践を行っている。ここでは２学期に実践した「ちいちゃんのかげおくり」（光村図書３年下）を例に指導の手立てを紹介する。

・言葉による見方・考え方を働かせている児童の姿を想定

　単元構想の段階で、指導の重点と言語活動を基に、言葉による見方・考え方を働かせている児童の姿を想定した。本単元では「登場人物の気持ちの変化や性格、情景について、場面の移り変わりと結び付けて具体的に想像することができる」という指導の重点から、「心に残った場面について自分の考えを伝えるときは複数の叙述をつなぎ合わせながら相手に伝えている」姿が、言葉による見方・考え方を働かせている児童の姿になると想定し、指導の手立てを考えた。

・想定した言葉による見方・考え方を働かせている児童の姿を実現するための手立て

　授業では、教材文の学習を進める際に教材文の全文を一枚にしたものを使用し、「複数の叙述をつなぐ」ということが視覚的にイメージしやすいようにした。また、それぞれの児童が着目した言葉を黒板の全文掲示に付箋で示し、交流の相手を選ぶ際のきっかけにした。

　児童が自分の着目した言葉について交流を行う際には、指導者が作成した交流のモデル動画を視聴した。モデル動画では、交流相手の選び方や、交流の目的を示しながら、心に残った場面について自分の考えを伝え合うときは複数の叙述をつなぎ合わせながら相手に伝える様子を強調した。このモデル動画を参考に交流を行うことで、児童は自分の心に残った場面を伝える際に、「○○の場面では△△だったけど、この場面では〜」と複数の叙述をつなぎ合わせながら交流する姿へとつなげることができると考えた。

・実際の授業での児童の姿

　参観した授業では、児童は「ちいちゃんのかげおくり」の中から自分が心に残った叙述とその場面のちいちゃんの気持ちを見つけ全文シートの叙述に線を引いておき、本時は心に残る場面とその理由となる叙述をはっきりさせることを目的として交流を行った。

　交流の前にモデル動画を視聴し、交流のポイントを確認してから児童は他の児童と考えを交流した。交流している児童の様子を見ていると。

Ａ「ぼくは、『なあんだ、みんな、こんな所にいたから来なかったのね』が心に残った。」
Ｂ「なんで心に残ったん？」
（叙述を指さしながら）
Ａ「ちいちゃんは『ひとりぼっちになりました』という所からずっとひとりでさみしかったけど、この場面で家族に会えて安心できたと思うから。」
Ａ「みんな空にきえてしまって」悲しいけど、また家族が集まれたのはよかったと思う」
Ｂ「なるほどじゃあこの二つはつながるんや」
Ａ「そう理由としてつなげられる」
（Ａ２つの叙述を線で結ぶ）

　このように、児童はモデルの動画と全文シートを活用しながら、自分の着目した言葉について指導者が想定した言葉による見方・考え方を働かせながら思いや考えを深めていく姿が見られた。はじめは自分の選んだ心に残った叙述について理由がはっきりしていなかった児童も、交流を通して叙述をつないで説明することができるようになっていった。

　これは児童が「言葉による見方・考え方を働かせる」ための手立ての一つである。今後も児童の主体的・対話的で深い学びの実現にむけ、児童が言葉による見方・考え方を働かせることができる手立てについて、研究協力校の指導者と協働で授業実践に取り組んでいきたい。

（滋賀県総合教育センター）

編集後記

▼９月例会（五一一回）の前半は12月の「第６回全国国語実践研究会滋賀大会」の開催県としての運営に当たって協議をしました。後半は機関紙「さざなみ国語教室（５１０号）の記事「言葉に気づく」（少徳信）「半年語の学級開き」（北島雅晴）を提案内容として研究協議をしました▼小徳さん実践では①物語の山場における感想をもとに内容を深めたこと②論拠をあきらかにしながら話し合いを深める過程で子供たちが文章の細部にまで目を向けるようになったことが話題になりました。しました。文章の山場に着目することは、場面ごとの読解で思いつかないことです。しかし、読むことの学習ではは入り口を山場にすることは全体とと部分から理解を深めます。このことは山場までの物語の展開を理解する力が求められるからです。▼北島さんの提案からは、国語教室づくりの基本と授業で大事にすることを学び合う機会になりました。特に、日記をはじめ、書くことと子ども理解について具体的な方法を学ぶことの大事さを共有することできました▼書くことについては、学級が落ちついてきたときクラスの子供同士、手紙を出し合うという実践の紹介がありました。手紙の出し合いは学級経営の面でも効果があります。手紙のよさは、一人一人が手紙の書き手と受け手になるというところです。手紙の内容は、良いところ書くことです。友達のいいところ探しをする雰囲気が生まれます日々が楽しいという話を心地よく聞くことがをできました。▼巻頭には、南川貴子先生から玉稿をいただきました。深謝。

（吉永幸司）